『総合政策論叢』第5号（2003年3月）
島根県立大学 総合政策学会

異文化理解における複眼的思考
― 日韓文化の同質性と異質性を中心に ―

朴　　容　寛

目　次

はじめに
1．自然環境の特徴と社会文化
(1)日韓の国土の特徴と社会文化
(2)日韓の山々等の特徴と社会文化
(3)日韓の梅雨等の特徴と社会文化
2．衣食住文化の特徴
(1)衣文化の日韓比較
(2)食文化の日韓比較
(3)住文化の日韓比較
3．日韓の同質的な異質文化
(1)道路の通行文化と並木
(2)お酒の飲み方
(3)喜怒哀楽の表現
(4)東屋づくりと庭づくり
(5)お墓づくり
(6)仮面劇と能
(7)お城づくり
(8)教会と神社
(9)箸の並び方および一人前
4．異文化理解における複眼的思考

はじめに

韓国と日本は海を共有している隣国であるにもかかわらず、よく近くて遠い国であるといわれている。ところで、近代以前は、韓国人と日本人は自由に往来し、漢字、仏教、儒教などの文化を共有するばかりではなく、同じ言葉も多かった[1)]。このような友好関係は、壬辰･丁酉乱(文禄･慶長の役)で崩れ、さらに、韓日併合と36年間の朝鮮支配で悪化された。1965年に日韓の国交は正常化されたが、友好と信頼関係を取り戻せなかった。ところが、韓日の両首脳の「21世紀に向けた新たなパートナーシップ宣言」(1998年10月)や

「2002FIFAワールドカップの韓日共催」などにより、日韓両国は友好親善関係になりつつある。しかしながら、北朝鮮の日本人の拉致問題や核兵器問題などにより、この和解のムードは少し薄くなっているのではないかと思われる。2001年は、歴史教科書歪曲問題、小泉総理の靖国神社参拝問題、北方四島周辺地域での韓国のサンマ漁船の操業問題などにより、韓日関係は冷え込んだこともある。

このように、長い歴史からみると、両国の間は友好関係の期間が長かったが、戦後に限ってみると、どちらかといえば、両国が互いに不信に陥り、互いに憎み、怨み、誤解しあってきたといえる。その根本的な原因は、日本の朝鮮支配などの記憶だけではない。韓国と日本はよく似ている文化をもっていながらも、実は異なる面も多い。にもかかわらず、互いに相手の国が自分の国とたいてい同じであり、相手の国をよく知っているという錯覚に陥っているのではないだろうか。自分の国の眼、思考、文化から相手の国を判断するから諸誤解が生じ、異質な点を互いが尊重しないから諸摩擦が生じているのではないだろうか。

本稿では、この問題意識から、両国の文化の同質性と異質性を明確に浮き彫りにし、いかに相互親善の道を開き、それを維持し、21世紀の真のパートナーシップを築くことができるだろうか、さらに異文化理解の近道は何であろうかなどを明らかにしたい。

1．自然環境の特徴と社会文化

まず、自然環境の面からみると、韓国と日本は同じく温帯地域に属し、美しい四季の移り変わりがある。韓国と日本はともに、春夏秋冬の区別もはっきりしており、季節とともに自然の色も様々に変わる。春には花が咲き、夏には梅雨が降り、秋には紅葉が美しく、冬には雪が降る。韓国も日本も山が多くて平地が少ないので、資源が乏しいのも同じである。韓国と日本の標準時も同じである。それ故、相手国へ旅行する際には、自分の国のどこかへ旅行する時と同じ用意をすれば済む。しかしながら、両国の社会文化を少し注意深く観察すればするほど様々な違いがあり、社会文化や国民性などにはかなり異なる部分があることに気づき、驚くほどである。

(1)日韓の国土の特徴と社会文化

韓国は南北1,000kmの韓半島に位置している。韓半島の北西部は中国と国境を接しており、南東側には日本が横たわっている。それ故、ひとたび事が起これば、いつでも大陸へ逃げることができる。と同時に、多くの試練に見舞われてきた。例えば、韓国は2000年間にわたって960回の外部侵略を受けてきた。ところが、文士社会であった韓国では文弱に陥り、国家はあまり国民を保護することができなかった。頼りうるのは自分自身であり、親類集団であった。そこから韓国では負けず嫌いな国民性、救い主信仰(洪吉童伝、鄭道令説話、天思想など)、血縁関係を重視する親族中心的思考・行動パターンが生まれたと思われる。

その反面、日本は6,800余の島々からなっており、逃げるところはないが、その代わりに、外部からの侵略はほとんど受けなかった。外部との戦争といえば、白村江の戦、蒙古の襲来、陶器戦争、世界戦争ぐらいである。国土の広さから見ると、日本は約37万8,000km^{2}であり、22万2,000km^{2}である韓半島の約2倍(南韓の4倍)である。長さからいえば、日本列島は寒帯である北海道から亜熱帯である沖縄まで南北約3,500kmであり、韓半島の

3.5 倍の長さである。

比較的に狭い韓半島では、歴史上早い時期に開拓地がなくなった。また、新羅が韓半島を統一したのは 668 年であり、一時的には後三国時代はあったが、その後、単一政権によって支配されて、中央集権国家体制を維持しつづけてきた。そして、936 年には高麗王朝が成立してから文に傾き始め、958 年には科挙制度が導入され、1392 年には儒教を国家の基本理念として定めた朝鮮王朝が成立し、韓国は文士中心社会となった。故に、武士階級は副次的な存在しかなかった(拙稿、2002c、39 頁)。文士社会の中心は儒教理念を具現しているソンビであった。ソンビは清廉潔白で志操を重視し、どんな環境でも品位を失わず至高の精神を維持すると同時に、世俗に染まらず常に学問を愛した。それ故、ソンビが上からの命令を断ったとしても、ソンビ自身の信念、儒教理念に基づいた行動は尊重され、罪に問われることはなかった。

この反面、日本では豊臣秀吉が、四国の長宗我部氏、九州の島津氏、関東の北条氏、東北の伊達氏などを征服して天下統一したのは 1590 年であり、最近まで北海道開発庁が設けられていた。それ故、侍を中心とした開拓の歴史が続かれてきたばかりではなく、地方領主を中心とする地方分権的統治が行われ、和の文化、集団中心の文化が形成されてきた。武士が君主に背くと切腹が命じられ、一般庶民が侍に逆らうと「斬り捨て御免」であったので、侍はいうまでもなく、一般庶民も統治者であるお上に畏まって服従しなければならなかった[2)]。このような背景もあり、日本では畏まる文化が韓国では賢がる文化がそれぞれ形成されたと思われる[3)]。畏まる文化である日本では天皇の万世一系が可能であったかも知れないが、賢がって政権争いを続けてきた韓国では万世一系は考えられなかったと思われる。

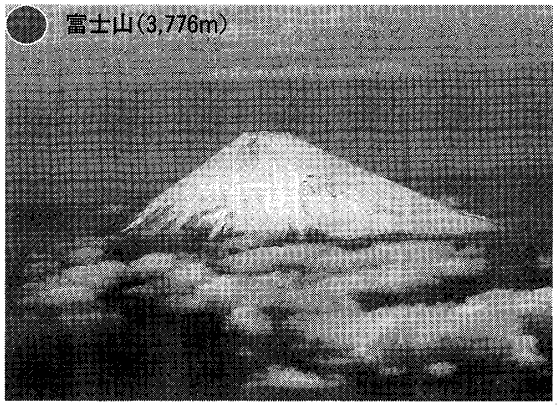
表 1　日韓の国土の特徴と社会文化

区分		国土の特徴	社会文化の特徴
韓国	広さ	22 万 2,000km^2、南北 1,000km→狭くて、開拓地がすぐなくなった、中央集権統治	①政権争い、②文士中心、武士階級は副次的→賢がる性格
	島	半島(3,000 余の島)→①逃げるところ：大陸、②多くの外部侵略(2000 年間に 960 回)	①頼るのは国家より自分･親類集団→負けず嫌い性格　②救い主を待つ(洪吉童伝、鄭道令思想、天思想、暗行御士等)
日本	広さ	37 万 8,000km^2、東西 3,500km→開拓地が最近まであった	①開拓サムライが重視される(東国)→武士社会→お上に畏まって服従
	島	島国：6,800 余の島々→①逃げる所なし、②少ない外部との戦争 ③地方分権的統治	②地方分権→領主を中心とした自治→和の重視、集団中心

(2)日韓の山々等の特徴と社会文化

韓国では3,000m以上の山も、活火山も一つもない。総じて1,000m前後であり、あまり高くない。韓国で最も高い白頭山は海抜2,744mで、死火山である。南韓の最高棒である漢拏山は1,950mであり、1,720余mの噴火口があるが、やはり死火山である。しかも、韓国の山々は高齢期に属し、岩石の山が多い。韓国には地震はあまりない。韓国地震研究所の統計によると、M(magnitude)3.0以上の地震が1900年から1999年3月まで発生したのは567回で、年平均5~6回しかなかった。しかも、ほとんどがM4以下であり、M5以上M6以下のものは2年に1回くらいしか起こらなかった(http//www.safe.or.kr)。韓国では台風は年3回くらい来襲するが、その被害は日本ほどひどくはない。また、日本ほど川の数は多くはないが、豆満江、漢江など長くて幅の広い川が悠々と流れている。例えば、韓半島の北にある鴨緑江の長さは803kmで、流域の面積は6万3,160km^2、豆満江の長さは548km、流域の面積は3万2,920km^{2}である。韓半島の南にある洛東江の長さは525km、流域の面積は2万3,860km^{2}であり、漢江の長さは406km、流域の面積は3万4,473km^{2}である。それ故、自然は征服可能な存在であり、親しい存在である。恐ろしい存在ではない。自然は遊び場であり、憩いの場であり、楽しむ場である。故に、韓国の人々は日本人よりは呑気な性格をもち、アニミズムの影響も日本よりは少ないと考えられる。

出所：http://www.kaeri.re.kr/photo/



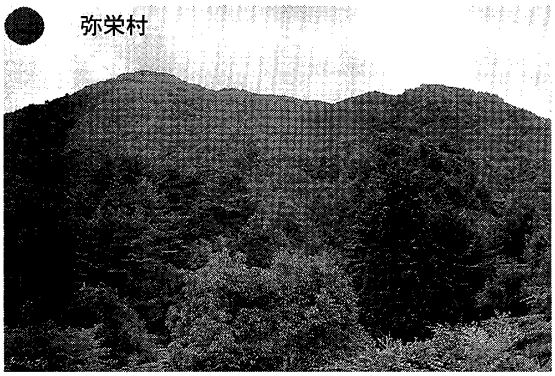
出所：2002年11月28日　筆者撮影

これに比べると、日本では連なっている高い峰、木は茂って森となり、3,000m以上の山々が多いばかりではなく、険しくて青年期の山々であり、峡谷も多い。3,000m以上の山が3,776mの富士山をはじめ、北アルプスに11座、南アルプスに9座、合計21座もある。また、日本列島における火山の数はおよそ200であり、そのうち86が活火山である。全世界中の火山が800ほどであるので、日本にその10分の1があるわけである。日本で地震が起こらない日は稀である。気象庁データによると、1949年から1998年までの50年間にM8級が3回、M7級が52回、M6級が502回、M5級が3,640回、M4級が1万4,224回も発生し、平均的にはM8級が0.06回/年、M7級が1回/年、M6級が10回/年，M5級が73回/年，M4級が284回/年も起こっている(http://www.jma.go.jp)。日本を襲う台風の数もその被害も韓国のそれよりは大きい。気象庁キャンペーン資料によると、1971年から2000年までの30年間に7月から9月まで平均月1回くらい上陸した(気象庁、2002)。大型台風は風速40m以上であり、各地に集中的に雨が降り、洪水やがけ崩れ、家屋の浸水などの被害が出る。日本一の長さを誇る信濃川の長さは367kmであり、流域の

表2　日韓の山々等の特徴と社会文化

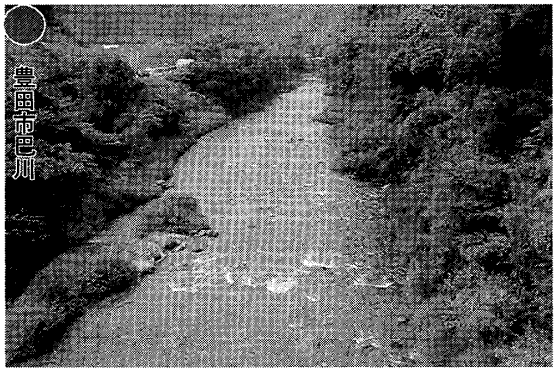
区　分		山々等の特徴	社会文化の特徴
韓国	山　々	低い山、高齢期の山、険しくない	征服可能な自然→自然親和的→自然は楽しむ存在→①呑気な性格、②アニミズムの影響が日本より少ない
	火　山	活火山は一つもない	
	地　震	あまり起こらない	
	川・江	長くて悠々と流れる	
	台　風	影響は日本より少ない	
日本	山　々	高い山と峡谷、青年期の山、険しい	自然は征服不可能な恐れる存在、怖がる存在→①自然順応的、②畏まって仕える存在→精霊信仰の対象、アニミズムの影響が韓国より強い
	火　山	全世界の火山の10分の1	
	地　震	盛んに起こる	
	川・江	短くて、速く流れる、危ない	
	台　風	数もその被害も韓国より大きい	

出所：2001年8月20日　筆者撮影



出所：2002年8月9日　筆者撮影

出所：2001年8月19日　筆者撮影



出所：http://www.ksl.co.jp/~tsusaka/ytomo2.htm

広さは約1万1,900km^{2}である。信濃川に次いで、日本で2番目に長い利根川の長さは322kmであり、その流域の面積は日本最大である1万6,840km^{2}である。このように日本の川は大陸と違って山と海の距離が近いために、その長さは短く、代わりに山から海に注ぐ川の流れは急で、速い。それ故、日本における自然というのは征服不可能な畏怖の対象であり、怖がる存在である。自然は畏まって仕える存在であり、山々、川、風などには何か神が宿っているのではないかと考えやすい。万物に霊魂や精霊が宿っているのではないかと畏怖し、それらを崇め祭る。この影響があるかも知れないが、科学技術が進歩したばかりではなく、先進国に進入してから久しいにもかかわらず、日本ではいまだにアニミズム信仰が強く残っている[4)]。

(3)日韓の梅雨等の特徴と社会文化

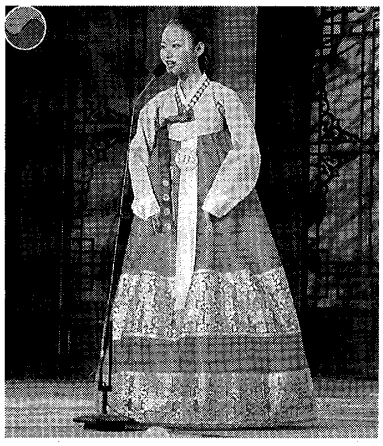
韓国でも日本でも梅雨がある。しかし、韓国の梅雨は短く、湿気があまりなくて、さっぱりした感じであるばかりではなく、土砂降りである。反面、日本の梅雨はじめじめ長く降り、さかんに降る。そうかも知れないが、韓国人の性格はさっぱりしており、気が短く、感情表現も豊かである。これに比べると、日本人は気が長く、考え深くて、感情表現はあまりしない。

表3　日韓の梅雨等の特徴と社会文化

区分	梅雨等の特徴	社会文化の特徴
韓国	梅雨は短い、さっぱり、土砂降り→①はげ山が多い、②洪水の被害が多い	①さっぱりした性格　②短気な性格　③感情表現が豊か
日本	梅雨は長い、じめじめ、盛んに降る→茂った森林	①気が長く、考え深い　②感情表現を避ける

2．衣食住文化の特徴

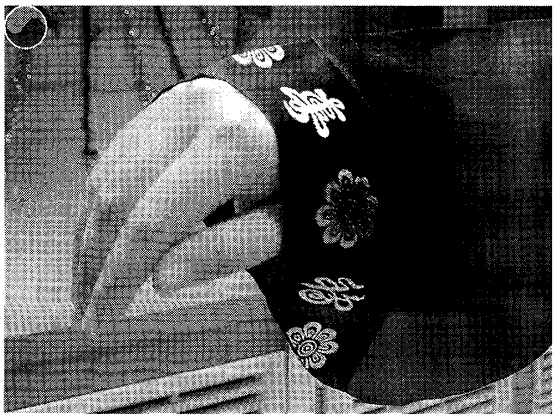
(1)衣文化の日韓比較



出所：2002年5月8日　筆者撮影

出所：2003年2月3日　筆者撮影

着やすく、動きやすいカジュアルな洋服と比べて、伝統衣装である韓服と着物は着にくく、活動的ではない。素材の面でも、洋服はウールが多いが、韓服や着物のそれは木綿や絹織物が多い。このように、韓服と着物は似ている面が多いが、異なる面も多い。例えば、



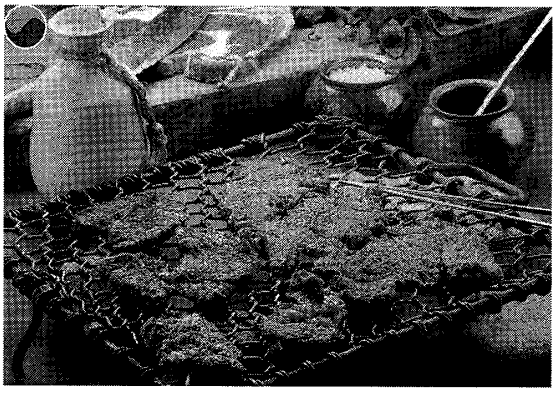
出所：2002年12月14日　筆者撮影

出所：2003年1月12日　筆者撮影

韓服は上下のツーピースであり、上下の配色の美を大事にする。着物はワンピースであり、一つの絵のようである。韓服でも曲線と直線の美しさの調和を求めてはいるが、どちらかといえば、袖などの曲線美を強調している。これに対して、着物では長方形の布を縫って作られた直線的な衣服であり、襟足、帯などのビューポイントを強調しているといえる。韓服はシンプルでサイズにゆとりがあり、どんな体型の人でもゆったりとして見えるが、チマの長さ、チョゴリの大きさ、パジの大きさなどには個々人に合わせて作る必要がある。これに対して、着物は体を包む風呂敷のようで、背が高い人、低い人、太っている人、やせている人など体型が多少違っても同じ着物で済み、融通性に富んでいる。

(2)食文化の日韓比較

洋食と違って、韓食も和食も主食とおかずが明らかに区別される。つまり、韓国人も日本人も、お米やその他の穀物を基本となる主食と、野菜や肉類･魚類などで料理されたおかずで食事をする。しかも両国民とも粘り強いお米を好んでいる。また、白菜や大根などの漬物を両国人はともに食べている。味噌やしょう油や塩で味をつけるのも同じである。お酒の場合でも、洋酒とか葡萄酒とは異なり、お米などで造ったお酒を飲んでいる。

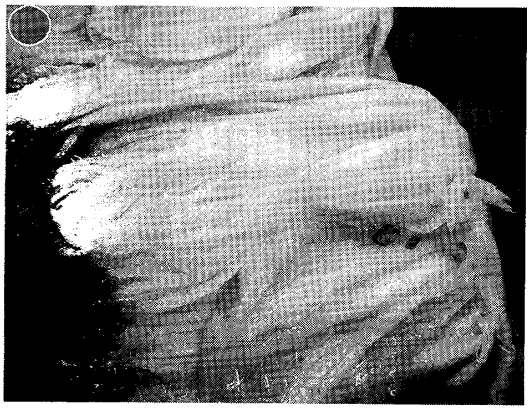


出所：国立国語研究院、2002、49頁。

出所：2002年12月21日　筆者撮影

しかしながら、両国の食文化をよく観察すれば、結構異なる面が多い。日本料理は眼と鼻で食べるが、韓国料理は舌で感じ、体で食べるといえる。日本料理は一つ一つの食材の味や色に拘わるので、スープ料理は少ない。これに対して、韓国料理は様々な食材の調和の味に拘わるので、コムタン、ソルロンタン、テールスープ、キムチチゲなどスープ料理が多くて、中身が何かは食べて見なければ分かりにくい。韓国料理の代名詞はブルコギ、

出所：2002年12月20日　筆者撮影



出所：2002年12月20日　筆者撮影

カルビ焼[7]などの肉料理であるが[8]、日本料理のそれは刺身、寿司など魚料理である[9]。麺類でも、韓国では冷麺やカルクッシであるが、日本ではそばやうどんである。同じ白菜や大根の漬物であるが、韓国ではキムチ[10]を、日本では御新香を食べる。

香辛料にも大きな違いがある。唐辛子は日本を経由して韓国へ入った。ところが、日本では唐辛子は定着せず、むしろ韓国の主な香辛料になった。日本での主な香辛料はわさびであるといえる。ところで、唐辛子もわさびも同じく辛い香辛料であるが、唐辛子の辛さは舌に来、それを食べた人は口をあけ、声を出しながら「辛い！」という。これに対して、わさびの辛さは鼻にツンと来、声も出さず、ただ涙を流しながら、辛抱する。唐辛子を食べたときの血液循環とわさびを食べたときの血液循環を比較して放送されたテレビ番組によると、唐辛子の成分は血液循環を良くさせるばかりではなく、血液を頭部のところへ偏る作用をするが、わさびのそれは血液循環を良くするより、それを心臓の所に溜める作用をするという(呉、1995、3頁)。この影響があるかもしれないが、唐辛子をよく食べている韓国人は日本人に比べて短気で、小さな刺激にもすぐ反応する。感情表現が豊かである。これに比べて、わさびをよく食べている日本人は、割合に気が長く、感情をあまり表現しない。遠慮深く、思慮深い。

(3)住文化の日韓比較

韓国と日本の伝統住宅は基本的に木造家屋であり、屋根も藁葺きや瓦葺きの住宅が多い。両国ともに履物を脱いで座敷生活をしているのも同じである。韓国と日本の伝統家屋は、同じく食事する場所と寝る場所が区別されていない。しかしながら、韓国の住宅はオンドル(温突)[11]であり、日本のそれは畳である。韓国の伝統住宅のほとんどは一階建てであり、窓は小さいばかりではなく、屋根も天井も低い。男性の生活空間と女性の生活空間が分かれており、それぞれが居住する別の住宅がある。これに対して、日本では、二階建てが多く、窓は大きく、屋根も天井も高い。男性と女性との生活空間の分離はなく、二つ以上の住宅は廊下で連なっている。

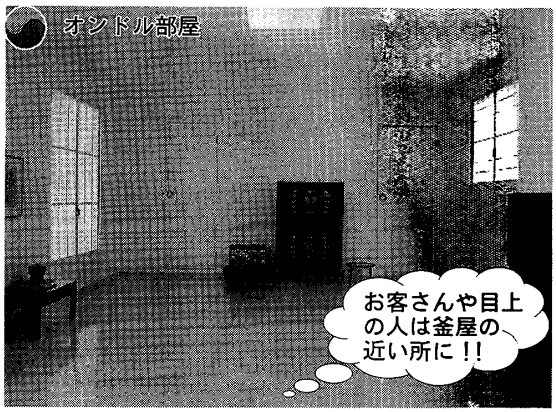
韓国は日本より少し寒いので、オンドル装置をし、室内の熱が外へ逃げないようにできるだけ窓を小さくした。住宅の材料として木材ばかりではなく、粘土も多く使い、天井も低くした。オンドルの熱を体に直に伝えるように、お尻を床に落とし、男性は胡坐、女性は片胡坐を立てて座るなど座り方にも影響を与えたと考えられる。炊き口に近いオンドルのよく利く場所は「上座」と呼ばれ、家の長老や老人、お客さんが座る。そして、儒教の

南原の水旨

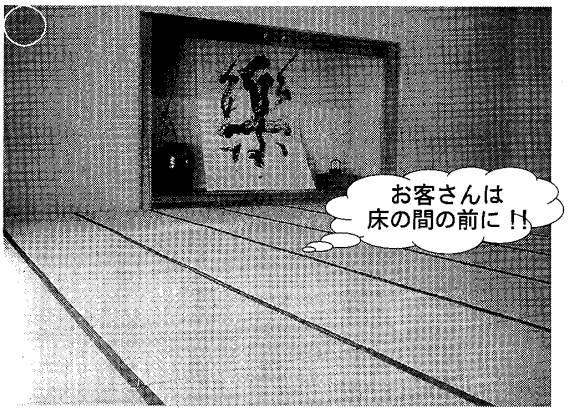
出所：2002年5月8日　筆者撮影

祇園の一力茶屋

出所：2002年6月3日　筆者撮影

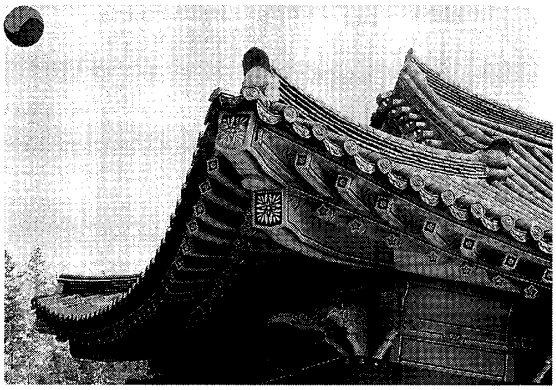


出所：国立国語研究院、2002、176頁。

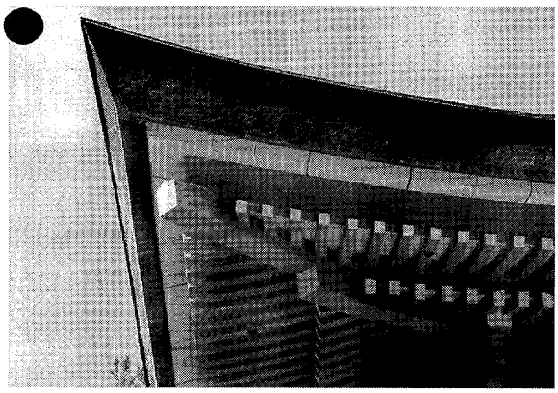


出所：2002年6月8日　筆者撮影

影響があり、伝統的な家屋は主婦を中心とする女性と子供が生活する母屋と、主人の居間であり、接客の場である舎廊棟で構成され、それぞれ独立した棟をなしている。日本は韓国より暖かい反面、雨が多く、湿気が多いので、通風がよくできるように工夫する必要があった。それ故、住宅を高く建て、窓を大きくし、風が吹き抜けやすくした。また、侍社会であったので、いつでも刀を抜いて闘うことができるように高く建てたかもしれない。暖房装置がないので、冷えを防ぐために畳を敷き、体が冷えないように正座をするようになったと考えられる[12)]。

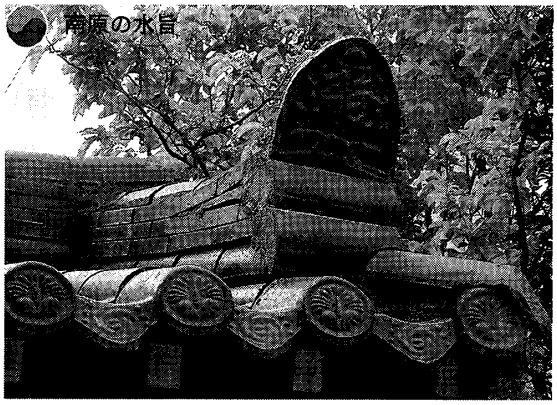


出所：2002年5月4日　筆者撮影

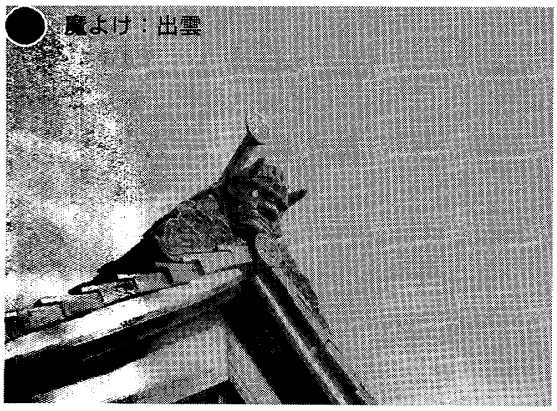


出所：2002年1月13日　筆者撮影

そして、韓国では一般庶民の住宅も曲線的であり、日本の魔よけにあたる福しるしの瓦がある。日本の住宅の場合、寺院などには少し曲線が導入されているが、一般庶民の住宅のほとんどは直線的である。寺院などの曲線も、どちらかといえば、刀で切った感じのよ



出所：2002年5月8日　筆者撮影



出所：2002年1月13日　筆者撮影

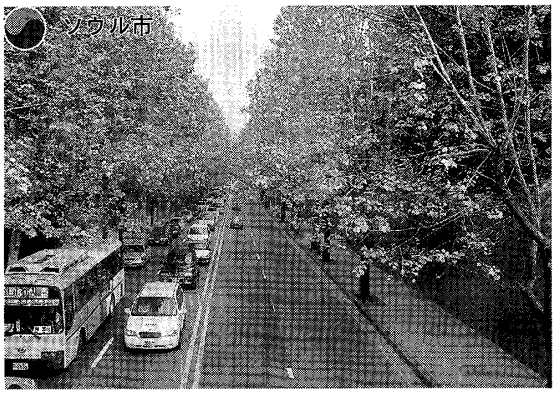
り硬い曲線であり、単純である。そして、自然の色を生かし、侘び、寂びの美を求めている。韓国の寺院や宮などには曲線的であるばかりではなく、様々な文様を鮮やかな色彩で描いた丹青が特徴である。

3．日韓の同質的な異質文化

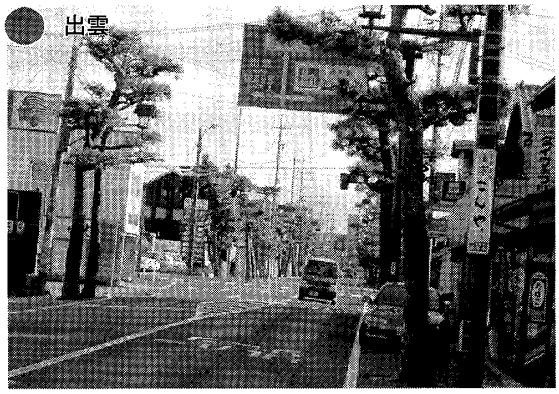
韓国と日本の社会文化を比較してみれば、表面的には同じであるかもしれないが、内容的には正反対であることも多い。

(1)道路の通行文化と並木

韓国では人は左通行、車は右通行であるのに対して、日本では人は右通行、車は左通行である。韓国の並木はたいてい自然のままであり、剪枝は最小限にとどまるが、日本での並木はほとんど剪枝されている。



出所：2002年5月12日　筆者撮影



出所：2002年1月13日　筆者撮影

(2)お酒の飲み方

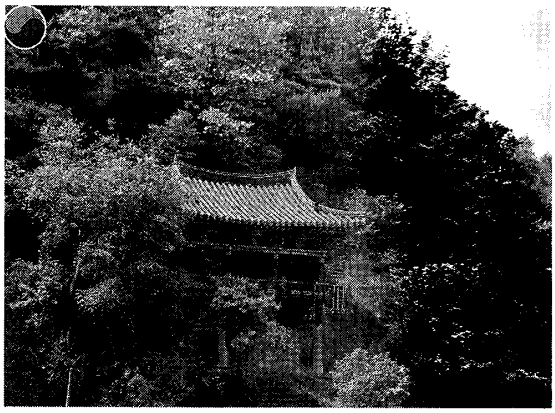
韓国と日本ではウィスキーや葡萄酒ではなく、お米で作ったお酒を飲んでいるが、その飲み方は異なる。韓国では儒教の影響もあり、目上の人の前ではがぶがぶ飲まなくて、横を向いて遠慮しながら飲むことが礼儀である。これに対して、日本では、その決まりなどはない。

(3)喜怒哀楽の表現

日本人は喜怒哀楽をストレートに表現しない。感情をあからさまに言動に表すことを取り乱しているといって、恥ずかしく思う。悲しいといって他人の面前で慟哭し、嬉しいといって体一杯で喜びを表すことを下品だと軽蔑する。悲しいときも、嬉しいときも表情に出さず、忍び泣き忍び笑うのが日本人である。これに対して、韓国人は喜怒哀楽をストレートに表現する。身内の不幸など悲しいときには「アイゴー！アイゴー！」と慟哭し、嬉しいときには「ハハ」と大笑い、感情を表現する。

(4)東屋づくりとお庭づくり

韓国では美しい景色があるところへ東屋を建て、自然を鑑賞したり、人生を吟味したり、楽しむ。韓国人の自然観は、人工を加えないで自然のそのままの姿で、楽しむことである。韓国にも慶州の雁鴨池、ソウルの秘苑、南原の廣寒楼苑などの有名な庭園がある。これら



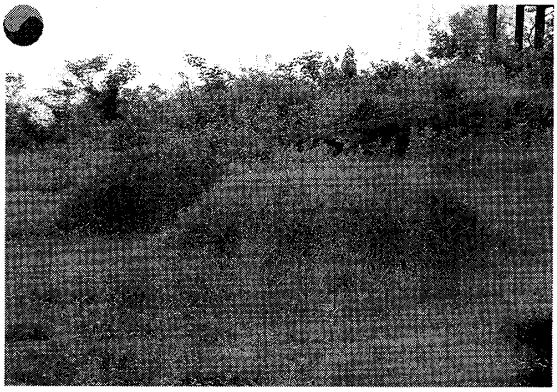
出所：2002年5月4日　筆者撮影

出所：2002年6月3日　筆者撮影

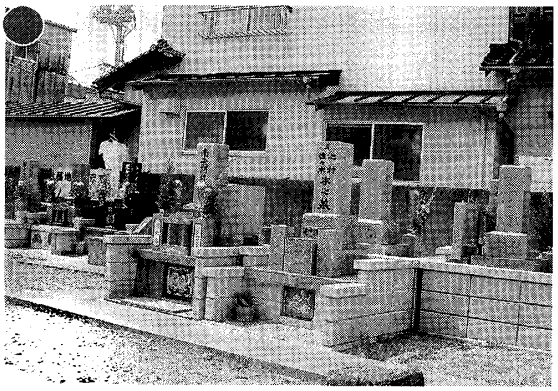
は自然の美を損なわない範囲内で、人工的な面をできる限り少なくし、自然の美を生かしているのが特色である(金渙、1994、39頁)。これに対して、日本では大自然をミニアチュア化して、人工的な庭を造り、樹木の剪定や人工的な変化によって、形成された美しさを鑑賞する。

(5)お墓づくり

韓国でも日本でも一連の葬儀が終了すると、遺体はお墓に収められる。ところが、土葬か火葬かの差もあるが、死に対する考え方には違う面が見られる。韓国では「生」の領域と「死」の領域を完全に分けている。例えば、韓国では人里離れた山中など、人々があまり居住空間として使わない場所にお墓を建てるのが一般的である。これに対して、日本では「生」の領域と「死」の領域との区分が曖昧である。例えば、日本では一般的に自分の檀家であるお寺ばかりではなく、自分の家のすぐ傍、つまり、自分の庭や畑、敷地内にお墓を建てている。この世とあの世との曖昧さがある故、日本人は「あの世」に対して親近感さえ感じ、日常生活のうちに「神」や「霊」といった存在を身近なものであると考えるかも知れない。



出所：2002年5月8日　筆者撮影

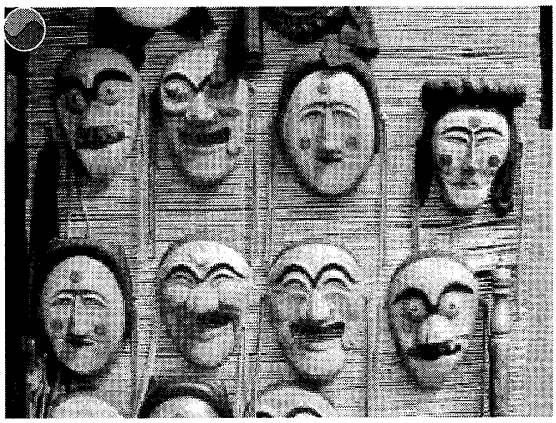


出所：2002年3月17日　筆者撮影

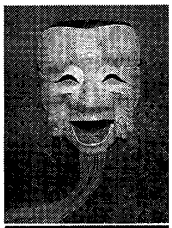
(6)仮面劇と能

仮面劇も能も面をかぶって演じているのは同じであるが、異なる面が多い。仮面劇には仮面をかぶって支配階級である横暴な両班の虚勢や不正、高名な破戒僧が女性と戯れる姿などを辛らつに批判し、風刺するなど、一般庶民の批判意識を強く表す。それ故、庶民たちはこのパフォーマンスを通じて押さえ付けられていたうっぷんを痛快に発散させてきた

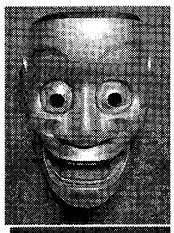
といえる。強いられていた厳しい生活を遊びに変えたわけである。そのため、日本の能のように専門の職業俳優は必要ない。特別な舞台もない。少し広い場所があるなら、どこでも役者と観客が一つに演じ、興じる一つの遊びである。それ故、仮面劇で使っている言葉は誰でも判かりやすく、ユーモラスが溢れている。仮面劇を見たり、演じたりするうちに、ともに笑ったり、ともに泣いたりして、日ごろに溜め込んでいた恨みや鬱憤などを発散させるのである。それ故、仮面劇は一つの遊びの場であり、リラックスする場にもなる。



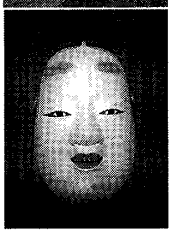
出所：2001年8月12日　筆者撮影



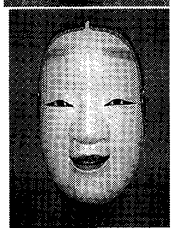
翁



大飛出



増女



小面

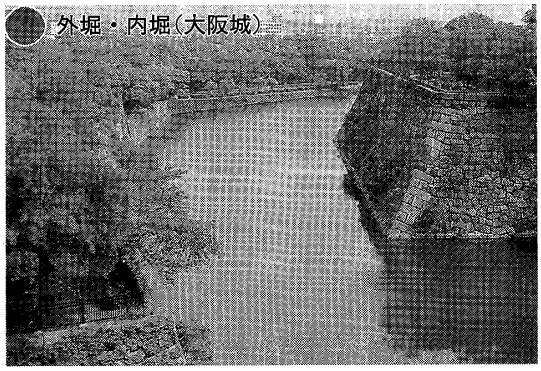
出所：殿三一男氏の作品、大橋清秀氏の所有、
2003年2月17日　筆者撮影

これに対して、能には怒りや恨みをもっている精霊、亡霊、怨霊を仲裁することが多いので、幽玄美が大事である。ちゃんとした舞台があり、観客は鑑賞するだけである。能で使っている言葉は、日本人さえ解説がなければ理解しにくいほど難しい。能の雰囲気は初めから終りまで厳粛であり、緊張せざるをえない。この緊張を少しでもくつろぐために、能と能の間に同じ舞台で狂言が演じられるのではないかと考えられる。まじめな能のストーリーで緊張していた観客は、面白いセリフとユーモラスな動作で演じられる狂言を見、ひとリラックスしてから能の幽玄の世界へもう一度入るのではないかと思われる。

(7)お城づくり

日本で偉い侍は、内堀・外堀の揃ったお城を造り、その真ん中に天守閣を高く建てることによって、いつ攻めてくるかも知れない敵を防衛し、攻撃しやすくすると同時に、自分の力と威厳を誇った。これに対して、文士社会であった韓国では内堀･外堀や天守閣はない。その代わりに、敵が攻めてくる際、防衛しやすくするために山城を築いた。

出所：2001年8月25日　筆者撮影



出所：2002年6月4日　筆者撮影

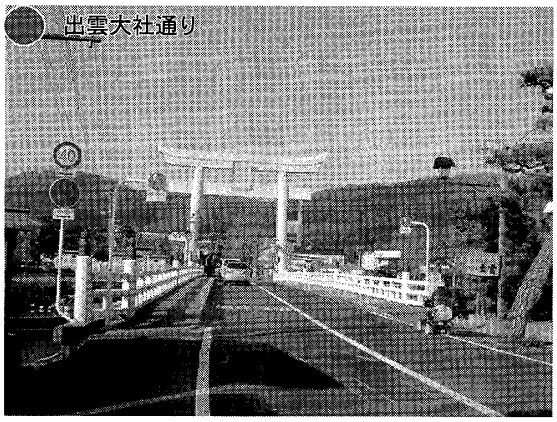
(8)教会と神社

日本の町へ出かけると、どこでも神社やお寺がある。これに対して、韓国の町へ出かけると、日本の神社やお寺の数以上に教会があることに気づく。韓国の街の中でお寺があまり見えないのは、もっぱら解脱を目指している韓国の仏教の伝統と朝鮮時代の崇儒抑仏政策の影響もあり、韓国のお寺は山寺が多いかもしれない。

読売新聞の国民意識調査によると、日本人の82.6%が家の中に仏壇・神棚などがあり、64.4%は元旦に神社へ初詣に行くという(読売新聞、1989)。東京の明治神宮には毎年400万人近く、大阪の住吉大社には毎年300万人近くの人々が参拝しているという。そして、80%近くの人々がお守りやお札を持っているという(日本語国際センター、1991、80頁)。

一方、1995年の統計によると、韓国人の50.7%の人が宗教をもち、そのうち、仏教信者が46%、キリスト教信者が52%(プロテスタント39%、カトリック13%)である(海外広報院、2002、146頁)。宗教がないと答えた人々の多くは、どちらかといえば、儒教の倫理を守っている人々ではないかと考えられる。元旦には1,000万人のクリスチャンは教会で元旦礼拝を神にささげる。クリスチャンではない人々は、日の出の名所へ行く人も、自分の祖先を祀るために実家へ帰る人もいる。

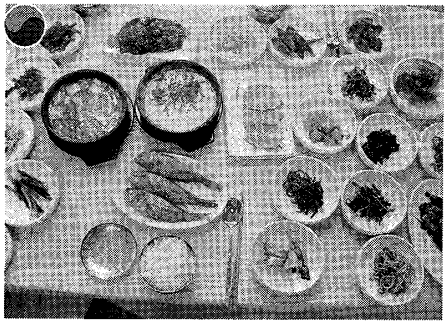
出所：2001年8月12日　筆者撮影



出所：2002年1月13日　筆者撮影

(9)箸の並び方および一人前

欧米とは違って、韓国人や日本人はフォークやナイフを使わず、同じく箸を使って食事をするにもかかわらず、その揃え方も食事する習慣も異なる。日本では割り箸を横並びにし、一人前ずつ出してもらう。これに対して、韓国では金属製の箸とスプーンを縦並びにし、共同食事テーブルを囲んで、共同で食事をする。

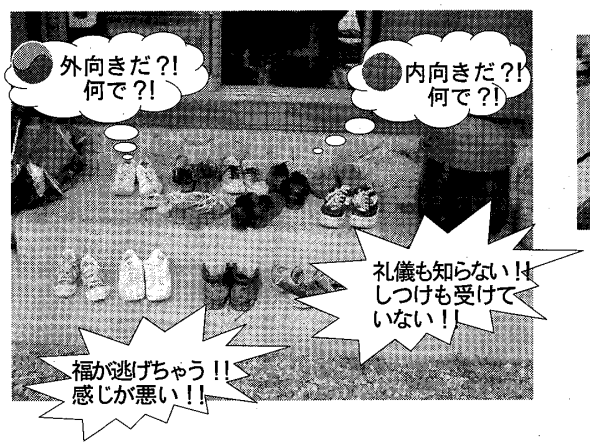

出所：2002年5月6日　筆者撮影

出所：2002年6月13日　筆者撮影

4．異文化理解における複眼的思考

このように韓国と日本はたいてい同じ文化を持ちながらも、正反対の文化、習慣、習俗を持っている。本稿で主張したいのは、ある国の文化や習慣は優れており、他国の文化や慣習は劣っているということではない。論じたいのは、互いにそれぞれの違いを認め、尊重し合う、理解し合うことが大事であることである。

韓国と日本は同じく座敷文化をもち、家に上がる時には履物を脱ぐのは同じである。しかし、靴の揃え方は正反対である。韓国人は靴を内向きに揃えるが、日本人はそれを外向きに揃える。侍社会であった日本では、奇襲や討ち入りも度々で、いつ攻めてくるかもしれないので、すぐに逃げたり、立ち向かったりするために履物をあらかじめ外側に向けて揃える習慣ができたのはないかと考えられる。もし、韓国人は日本人の靴の揃え方を見て、「せっかく入った福が自分の家から逃げてしまう」のだと嫌がり、日本人は韓国人の靴の揃え方を「礼儀も知らない人だ」、「仕付けも受けていない人だ」と、互いに軽蔑し、罵れば友好親善の道は遠いのはいうまでもない。互いに誤解しあうばかりである。



出所：2001年8月14日　筆者撮影

出所：2002年12月14日、2003年1月29日　筆者撮影

また、韓国と日本は同じく味噌汁を飲んでいるが、韓国では味噌汁にご飯を入れて食べても行儀が悪いとは言わないが、日本では「ネコまんま」といい、行儀が悪いとされている。また、韓国では食卓に茶碗を置いたままスプーンで飲むが、日本人は茶碗を手で取って飲む[13]。この場面で、日本人は韓国人に対して「犬食いだ」と軽蔑し、韓国人は日本人に対して「乞食だ」と非難しがちである。しかしながら、どの飲み方も自国の食事礼儀からみれば、ともに礼儀正しいのである。

私たち人間は、自分が持っている考えや感情を他人も持っていると考えがちである。他人を判断する際、人は簡単に自分を善玉の側に置きがちである。ステレオタイプでとらわれがちである。これは異文化を理解し交流する際、誤解の源になりうる。それ故、他国や民族・文化などを自国の思考や文化枠ではなく、他国や民族や文化をあるがままの素顔で見、理解しなければならない。これが国際交流、異文化理解などにおける複眼的な思考である。そして、われわれ人間は、いくつかの断片的な特徴だけを見て、それが他者あるいは他国の全特徴であるかのように判断しがちである。これが国際関係におけるもう一つの誤解の根源になりうる。したがって、伝統文化や歴史などがまったく異なる国の社会文化

を理解する際、断層的かつ断面的な知識や理解ではなく、総合的かつ重層的な理解が必要である。すべてのことはすべてにつながっているという関係的思考が必要である。

注

1）例えば、海という単語を韓国では「パダ」と言い、日本では海の神を「わたつみ」というし、母という単語を韓国では「オモニ」といい、日本語の「母屋」は「おもや」と読んでいる(金渙、1994、79頁)。

2）もちろん、武士の世界には君主に対する忠義があり、侍は必ずしも君主が怖いので君主の命令に従ったわけではない面もある。そして、侍に切腹が認められたのは、ある意味では侍の名誉を尊重した面もないわけではない。

3）具体的な畏まる文化と賢がる文化は拙稿(2002a、2002c)を参照させていただきたい。

4）岩井宏実によると、八百万の神々を信じている日本人の姿を次のように述べている。「人は何か苦しいことや絶体絶命の窮地に陥った際、心の中で神に救いを求める。...(中略)...日本人の神への信仰は、...(中略)...万物に霊魂や精霊が宿るとして畏怖し、それを崇め祭った。...(中略)...日本の神は、キリスト教における「神」...(中略)...のように唯一絶対ではない。...(中略)...様々な願いに恩恵をもたらしてくれる多くの神が存在する。太陽や月や星、それに雷や風といった神話に出てくる神もあれば、民間で信仰されるようになった神、もとは人間であったり動物であったりした神もいる。自然現象から動植物まで、あらゆるものがほとんど神になっている。日本においては、どんなものでも神格化の可能性を秘めている」(岩井、2002、14-15頁)。

5）韓服の最も古い形は高句麗(BC37年～AD668年)の壁画に見られる。男性服、女性服ともに上衣と下衣で構成され、一般的に、男性はチョゴリ(上着)、パジ(ズボン)を、女性はコルムという二つの長い結び紐で前を止めたチョゴリ、足下まで届く長いラップススカートのチマを着る。

6）韓服は豊かなボリュームがあり、ちょっとした身動きでも流れるような曲線美がある。

7）ブルコギとは、肉をソースに浸けて味つけした焼肉で、カルビ焼きは骨付きの焼肉である。

8）韓国人の祖先は本来、中央アジアで活躍していた遊牧民族で、徐々に東に移動し、韓半島に定着したものであるので、肉を食べる食文化を持っていた。ところが、高句麗、百済、新羅の三国時代から仏教が入り、その後、高麗(918年～1392年)王朝では仏教が国教としていたので、肉食が禁じられていた。13世紀に入って、遊牧民族であるモンゴルの侵略で肉食の風習が再び復活した（文化観光部、2002、46頁)。

9）日本は島国らしく、簡単に新鮮な海産物を手に入れることができるので、魚料理が多いと思われる。一方、長い間仏教の影響が強い、肉食は禁じられていたので、肉料理はあまり発達していなかったと考えられる。日本で肉食し始めたのは明治以後である。

10）キムチは野菜を長期間、新鮮に保存するために漬けられたのがその始まりである。キムチは、白菜、大根、ネギ、キュウリなどの野菜に様々な調味料を入れて発酵させた、漬物の一種である。キムチは唐辛子粉をたっぷり入れて塩辛く味つけしたもの、唐辛子粉を入れないで白く漬けたもの(ペックキムチ)、味つけしたスープを多めに入れて漬けたもの(ムルキムチ)など多くの種類がある。研究結果によると、キムチは成人病の予防にも優れた効能があるばかりではなく、唐辛子と野菜に豊富に含まれているミネラル成分が肥満を防ぎ、ダイエットの効果があるという(上掲書、32頁)。

11）オンドルは韓国固有の暖房設備で、寒さの厳しい北部で最初に使われてきた。煙と熱気が床下に造られた煙道を通じて熱を伝え、部屋を暖めるようになっている。

12）日本で正座という座り方には畏まる文化を反映されているのではないかと考えられる。江戸時代に小笠原流などを主流とした「正座」の流行は、目上に対して謙り、畏まることを世に広める作用をしたと考えられる。

13）韓国料理は熱いものが多く、スープが多いので、茶碗を持たずに、スプーンで食べる習慣が生

じた。日本でも平安時代まではスプーンを使って食べていたが、スープ料理が少ないのでスプーンは徐々に使わなくなった。また、木製の器の技術が発達し、器が軽くて小さいので、器を手に持って食べる習慣が生じた。

参考文献・資料

岩波講座 1962『日本歴史』岩波書店。
李基白 1976『韓国史新論』ソウル、一潮閣。
岩井宏実 2002『日本の神々と仏』青春出版社。
呉善花 1995『ワサビと唐辛子』祥伝社。
苅谷剛彦 2002『知的複眼思考法』講談社。
韓国国政広報処海外広報院 2002『韓国のすべて(2002年度版)』。
韓国原子力研究所写友会ホームページ(http://kaeri.re.kr/photo/)。
韓国地震研究所ホームページ(http//www.safe.or.kr)。
韓国文化観光部 2002『韓国のイメージ(2002年度版)』。
気象庁ホームページ(http://www.jma.go.jp)。
気象庁キャンペーン資料第278号、2002.5.10。
金両基 1987『キムチとお新香』中央公論社。
金両基 1990『オンドルと畳』大和書房。
金両基 1999『日本の文化　韓国の習俗 — 比較文化論』明石書店。
金両基監修 1993『韓国』新潮社。
金渙 1994『韓国と日本の比較文化論』明石書店。
金容雲 1994『かしこ型日本人とかちき型韓国人』学生社。
国際交流基金日本語国際センター 1991『日本人の考え方』。
国立国語研究院 2002『わが文化の道案内』ソウル、ハッコジェ。
在日本韓国文化院 1994『日韓文化論』学生社。
冨永佳也 1995『昆虫の脳を探る』共立出版。
三河の3つの大きな川 愛知発・地域教材「川の不思議のページ」ホームページ(http://www.ksl.co.jp/~tsusaka/ytomo2.htm)
朴容寛 2001a「日韓関係の今(上) — 民間交流の活性化が重要」『山陰中央新報』(9. 21)、22。
朴容寛 2001b「日韓関係の今(下) — 相互理解と努力で共存」『山陰中央新報』(10. 5)、26。
朴容寛 2002a「武士社会・文士社会」『山陰中央新報』島根県立大学NEARセンターリポート(1. 24)。
朴容寛 2002b「複眼的思考の実践を目指して」『島根県立大学学報』第9号(1. 1)、5-6。
朴容寛 2002c「畏まる文化と賢がる文化 — 忠臣蔵と春香伝を中心に」島根県立大学『総合政策論叢』第3号(3) 27-45。
『読売新聞』1989.10.11 (平成時代の日本人 — 国民意識定期調査)。

キーワード：日韓文化　畏まる文化　賢がる文化　友好親善
異文化理解　複眼的思考

(PARK Yonggwan)